

令和七年（二〇二五）三月二十七日発行
『大倉山論集』第七十一輯抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

第三十三代横綱・武蔵山の足跡をたどる（一）
―第二十五回特別資料展の報告を兼ねて―

公益財団法人 大倉精神文化研究所

第三十三代横綱・武蔵山の足跡をたどる（一）

―第二十五回特別資料展の報告を兼ねて―

公益財団法人大倉精神文化研究所

第三十三代横綱・武蔵山は、横浜市港北区日吉本町の出身である。圧倒的な強さでみせた目ざましい昇進、近代の体型に都会的な風貌。そして、熱心な親孝行ぶりに子どもや女性からも人気を得、多くの相撲ファンを熱狂させた。昭和初期の角界を代表するといっても過言ではない、当時の花形力士である。本稿を執筆している令和六年（二〇二四）現在でも、神奈川県出身の横綱は、武蔵山ただ一人である。しかし、様々な不運が重なり横綱になってから活躍出来なかったために悲劇の横綱と呼ばれたことや、入れ違いに双葉山の連勝が始まったことなどから、武蔵山に関する研究はほとんど無く、真偽不詳の逸話が検証もされないまま孫引きされる状況が今も続いている。

公益財団法人大倉精神文化研究所では、活動の柱の一つとして「地域における歴史・文化の研究及びその成果の普及」を掲げている。武蔵山が当研究所の立地している港北区出身であることから、当研究所では地域ゆかりの人物で

ある武蔵山関連資料を長年幅広く蒐集、研究してきた。地元在住の寺田秀治氏は、そうした活動に御理解を示され、武蔵山関連資料を中心とした昭和前期の資料を平成三十年（二〇一八）から四〇回余りにわたり数多くご寄贈下さっている。その資料は、現在では当研究所所蔵の武蔵山関連資料の主要部分を占めるまでに至っている。それらの資料群を活用した研究の成果を公開し、武蔵山の実像を多くの方に知ってもらうべく、令和元年（二〇一九）に第十五回特別資料展「第三十三代横綱武蔵山展―日吉から大相撲の頂点へ―」を横浜市港北図書館一階の港北まちの情報コーナーで開催したのを嚆矢として、これまでに武蔵山関連の資料展を八回、講演会を三回開催してきた。

第二十五回特別資料展「横綱武蔵山と昭和初期の相撲資料展」は、令和六年（二〇二四）三月八日（金）～四月十七日（水）の会期にて、横浜市港北図書館を展示会場として開催した（会期日数は四十日）。パネル枚数を従来よりも増やし、昭和初期に流行していた「写真番付」（力士の写真で表した番付）の原物を多数展示することで見学者が視覚でも楽しめるよう工夫した。また、武蔵山を含む昭和初期の横綱四名の実寸手形を設置。力士の身体の大きさが実感できる体験型展示を行った。

本稿では、当該資料展の報告の形式を取りながら、所蔵資料群を通して新たに見えてきた武蔵山の生涯を詳細にたどることを目的とする。展示パネルの記述は、長年にわたる詳細な学術的調査と研究の成果であるが、展示パネルという性格上、記述は結論のみになることが多い。そこで、文末の脚注において個々の学術的検証や多様な典拠資料等を記載した。

なお、紙幅の都合上内容を複数回に分割し、今年度はパネル全二十五枚中六枚分の報告とし、キャプションの一部に適宜加筆修正を施した。

第二十五回特別資料展 ごあいさつ

第三十三代横綱武蔵山（本名・横山武）は、横浜市港北区日吉本町の出身で、現在でも神奈川県出身唯一の横綱です。武蔵山は圧倒的な強さでのスピード出世と、筋肉質で均整のとれた体躯に端正な顔立ちで、子どもや女性にも人気となり、多くの相撲ファンを熱狂させました。母親思いの孝行息子として知られた武蔵山は、巡業先では必ず母親宛に手紙やお土産を送り、場所後の休日には、日吉の生家に帰って農業を手伝い、家族と語り合うのを楽しみにしていたといっています。

そして武蔵山が生まれた港北区では現在でも、綱島・新羽・大倉山の三ヶ所に土俵があり、毎年子ども相撲大会が開催されるなど、地域の方の支えの下で相撲への活発な取り組みが続けられています。

近年では横浜出身の幕内力士が誕生し、二〇二四年四月二十日には「大相撲横浜アリーナ場所」も開催されます。そこでこの度、地域ゆかりの横綱武蔵山と武蔵山が活

躍した昭和初期の相撲資料を紹介する展示会を企画いたしました。どうぞご覧ください。

パネル① 武蔵山 略年譜

第三十三代横綱武蔵山（本名・横山武）は、明治四十二年（一九〇九）十二月五日^②、橘樹郡日吉村字駒林の裕福な農家であった父横山仁平・母すゞの長男として生まれました。大正十四年（一九二五）に十五歳で出羽海部屋に入門、十六歳で初土俵を踏みます。十九歳で入幕を果たすと、二十一歳で大関昇進、二十五歳で最高位の横綱となります。三十歳で引退して年寄出来山（のちに不知火）を襲名し、大日本相撲協会の理事も務めました^⑦が、戦後すぐに廃業して相撲界を去ります^⑧。

晩年は生地の日吉で過ごし、昭和四十四年（一九六九）に五十九歳で心筋梗塞のため亡くなりました^⑨。

【表1】武蔵山略年譜

西暦	和暦	満年齢	武蔵山の動向	社会・相撲協会の動向
1900年	明治42年	0	【12月5日】樺樹郡日吉村字駒林に父横山仁平・母サキの長男として生まれる。	
1916年	大正5年	6	【4月】尋常駒林小学校（現日吉台小学校）に入学。 この間、父がカラフトへ失踪する。	
1922年	大正11年	12	【3月】尋常駒林小学校（現日吉台小学校）を卒業。	
1923年	大正12年	13		【9月】関東大震災。
1924年	大正13年	14	この頃、近在の草相撲に出かけでは、母親のため多くの懸賞品を持ち帰る。また、多摩川丸子の青年相撲大会に出場。 【秋】出羽海部屋に正式入門。	【10～11月】第1回明治神宮競技大会
1925年	大正14年	15		【4月】摂政宮（のちの昭和天皇）の誕生日を祝賀して台覧相撲開催、その下賜金で優勝賜金を作成。 【11月】引分・預りを廃止し、取直し制度を定める。 【12月】東京大角力協会の申請による財団法人大日本相撲協会の設立が認可される。
1926年	大正15年	16	【1月】初土俵、新序出世。 【5月】西序ノ口19枚目に昇進。	【2月】日吉駅開業。
1927年	昭和2年	17	【1月】東序二段28枚目に昇進。 【5月】西三段目48枚目に昇進。	【1月】東京・大阪両協会が正式合併、大日本大角力協会が成立、合同番付発表、年4回本場所興行（1月・5月の東京場所、春秋の関西場所）を設ける。 【5月】日本大角力協会に改称。
1928年	昭和3年	18	【1月】西幕下23枚目に昇進。 【5月】東幕下2枚目に昇進。	【1月】財団法人大日本相撲協会に改称。仕切り時間を制限、全十両力士は11日間連日出場、ラジオの実況中継放送開始。 【3月】不戦勝制度を確立。
1929年	昭和4年	19	【1月】西十両4枚目に昇進。 【5月】新入幕、東前頭8枚目に昇進。／海軍記念日大覧相撲優勝。	
1930年	昭和5年	20	【1月】東前頭2枚目に昇進。 【5月】東小結に昇進。	【1月】千秋楽で武蔵山と朝潮（男ノ川）の対戦が人気をよび、1912年（明治45）1月以来18年振りに満員礼止め。 【4月】明治以来初めてとなる皇居内での大覧相撲開催。
1931年	昭和6年	21	【3月】関西本場所優勝旗手。夏場所での初の幕内最高優勝。 【5月】会誌『武蔵山』刊行。夏場所での石野を負傷、その後の力士人生において致命傷となる。／次場所からの大関昇進が決定。 【10月】	【4月】大覧相撲開催、これを機に上俵の直径を13尺（3 m94cm）から15尺（4 m55cm）に改め、二重土俵を一重、土俵の座敷を神明造りにする。
1932年	昭和7年	22	【1月6日】春秋園事件に参加し、大日本相撲協会を離脱。 【1月25日】相撲協会に復帰。	【1月6日】春秋園事件が起こり、参加力士が大日本相撲協会を脱退。 【2月】残留力士による改正番付を作り、部属別総当たり制8日間興行にする。 【4月】大倉精神文化研究所設立

1933年	昭和8年	23	【5月】海軍記念日天覧相撲第2位。	【1月】脱退力士の大半（革新力士団）が相撲協会に帰参。 【2月】関西本場所を中止し、春夏2回の東京本場所に戻る。 【9月】間脇沖ッ海がフナ中毒のため死亡。 【4月】慶應義塾大学日吉キャンパスオープン。
1934年	昭和9年	24	【6月】第4回相撲選士権大会優勝。 【9月】日吉の実家を新築する。	
1935年	昭和10年	25	【5月】番付編成会議で横綱昇進決定。／天覧相撲優勝。 【6月】第5回相撲選士権大会優勝。 【11月】横綱免許授与式。／第8回明治神宮体育大会全日本力士選士権大会第2位。	
1936年	昭和11年	26	【1月】9日目より休場。 【5月】全日程休場。	【5月】「相撲」（大日本相撲協会発行）創刊。 【12月】大倉精神文化研究所が財団法人になる。
1937年	昭和12年	27	【1月】全日程休場。 【5月】全日程休場。 【11月】第9回明治神宮体育大会全日本力士選士権大会第3位。	【4月】日吉村を二分して横浜市と川崎市に編入する。 【5月】この場所から13日間興業になる。
1938年	昭和13年	28	【1月】10日目より休場。 【5月】7勝6敗。	
1939年	昭和14年	29	【1月】全日程休場。 【5月】全日程休場。 【12月】引退相撲提出。	【4月】港北区誕生。 【5月】この場所から15日間興業になる。
1940年	昭和15年	30	【1月】年寄「出来山」を襲名（～1943年1月）、勝負検査役となる。 【5月】引退大相撲。	【1月】東西制復活。
1941年	昭和16年	31		【5月】横綱一代年寄制設定。
1942年	昭和17年	32		【1月】仕切り制限時間を短縮。
1943年	昭和18年	33	【1月】年寄「出来山」から「不知火」に名跡変更（～1945年11月）。	
1944年	昭和19年	34	【1月】相撲協会理事就任。	【2月】国技館が軍部に接収される。
1945年	昭和20年	35	【11月】年寄を廃業し、角界を去る。	【3月】空襲のため国技館被災。 【10月】占領軍に国技館が接収される。
1966年	昭和44年	59	【3月15日】心筋梗塞のため自宅で死去。戒名「松影院宝勝戒心信士」。	
2019年	平成31年		【3月】没後50年。 【12月】生誕110年。	

※令和元年（2019）の第15回特別資料展開催に際して、大倉精神文化研究所が作成した。

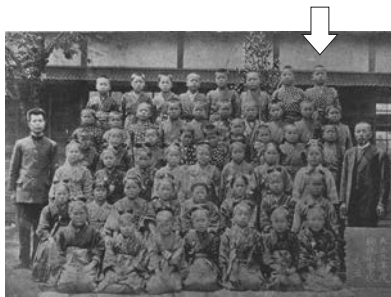
パネル② 横山武少年と相撲

怪力伝説

小学生の時に父がある事情でカラフトに去り、母と五人の兄弟は苦しい生活となりました。⁽¹⁰⁾

心優しい武少年は、母を助けて必死に働きました。体が大きくなって力も強く、「大人」とあだ名されていました⁽¹¹⁾が、大人のように働くという意味も込められていたのかもしれません。

・写真「日吉村立尋常駒林小学校に通った頃」



大正9年（1920）度、5年生のときの集合写真です。武少年は上段右端で、一番背が高い子でした。

尋常駒林小学校は、現在の横浜市立日吉台小学校です。現在の駒林小学校は、昭和48年（1973）に創立された別の小学校です。

『野球界』二五（七） 口絵⁽¹²⁾
《寺田秀治氏所蔵》

武少年と赤門坂

横山武家の門前には、「赤門坂」と呼ばれる急坂がありました。⁽¹³⁾武少年は、ある時子牛に荷車を引かせて、坂を登ろうとしましたが、牛はどうしても上れません。そこで、武少年は荷車を牛から外して、なんと自分で引っ張り上げてしまいました。⁽¹⁴⁾

・写真「赤門坂を上から見下ろす」



撮影：平成30年（2018）5月

・写真「地元の人たちとの集合写真」

『野球界』二五（七） 口絵⁽¹⁵⁾
《寺田秀治氏所蔵》
角界入り前の写真で、中段右から三番目が武少年で

入門のきっかけ

母親想いの武少年は、各地の草相撲に出かけては懸賞品を持ち帰っていました。¹⁶ ある時、多摩川丸子の青年相



す。村の青年団員としてラッパ手を務めていました。まわりの人とは肩幅がちがいます。

撲大会に出場したことが中原町（現川崎市中原区）町長の目に留まり、出羽海部屋入門の契機となりました。

明治神宮競技大会の謎¹⁷

武蔵山が現役の頃から、入門のきっかけは明治神宮競技大会に出場したことだといわれてきましたが、出場した記録は残されていません。¹⁸

・写真「母親の横山すゞ」

『野球界』二五（七）口絵¹⁹《寺田秀治氏所蔵》



父親不在の中、母親の横山すゞは女手一つで子供五人を育て上げました。

(引用者注・武蔵山は) 根が小さい時から非常に一石の男でして負けん気は強い方でありました。《中略》私と致しましては、父親はゐないしどうしても家に残つて家督を継いでほしいものだと云ふ念願で胸が一パイでありましたので最初はあれの相撲界入りを許しませんでした。

(横山すゞ「子を語る」『野球界』二五(七)⁽²⁰⁾)

パネル③ 出羽海部屋への入門

何人もの人が武少年に角界入りを勧める中で、大正十四年(一九二五)秋⁽²¹⁾、十五歳で出羽海部屋に入門しました。出羽海親方の命を受けた武隈勇治郎(元関脇・両国)が横山武家に日参し、複数回にわたる訪問でようやく口説き落としたのです。⁽²²⁾

私が武蔵山の家を見つけるのには随分か、りましたよ。《中略》(引用者注・一度あきらめて帰り、次は)三人挽きの人力車に乗つて行きましたね。《中略》色のまつ黒な金仏みたいな子供でした。私は一目見て、こり

や横綱になる、さう思ひましたね。武蔵です。

(武隈勇治郎「武蔵山を語る」『野球界』二八(八)⁽²³⁾)

・写真「武隈勇治郎(元関脇・両国)」

葉書(「東京力士」両国)《大倉精神文化研究所所蔵》



(1892~1960年)
大正3年(1914)に
新入幕優勝したこと
で知られます。

出羽海部屋

出羽海部屋は、初代出羽ノ海金蔵(後の運右衛門)によつて、江戸時代の寛政年間(一八〇〇年頃)に設立され、現在に至っています。⁽²⁴⁾ 相撲部屋の名門で、現存する部屋の中では最も多くの横綱(九名)を輩出しています。⁽²⁵⁾ 武少年の入門前後は部屋の全盛期であり、昭和六年(一九三一)の幕内番付の片側二〇名を出羽海部屋所属力士で占めてしまうほどでした。⁽²⁶⁾

・写真「第五代 出羽ノ海谷右衛門（元横綱・常陸山）」

正司實男『出羽海会誌』口絵⁽²⁷⁾《大倉精神文化研究所蔵》



(1874～1922年)

「角聖」と讃えられた第十九代横綱で、大正三年（一九一四）の引退後に「出羽ノ海」部屋を継承しました。⁽²⁸⁾

数多くの弟子を育てて、角界一の大部屋へと成長させました。武蔵山の兄弟子で、後にライバルとなる天竜の師匠でもあります。大正十一年（一九二二）死去。

・写真「第六代 武蔵山の師匠 出羽海梶之助（元小結・両国）」

正司實男『出羽海会誌』口絵⁽²⁹⁾《大倉精神文化研究所蔵》

出羽ノ海谷右衛門の死去後に、六代目として出羽ノ海部屋を継承しました。⁽³⁰⁾ 師匠として武蔵山を横綱まで育て上げました。⁽³¹⁾

・写真「昭和天覧角力」

『国際写真情報』九⁽³²⁾《大倉精神文化研究所蔵》



(1874～1949年)



昭和5年（1930）4月29日開催の天覧相撲に際して撮影された東西力士集合写真です。

前列左から、天竜（最高位：関脇、当時東前頭筆頭）、武蔵山（第三十三代横綱、当時東前頭二枚目）、常ノ花（第三十一代横綱、当時東横綱）、宮城山（第二十九代横綱、当時西横綱）、大ノ里（最高位：大関、当時東大関）。

写真に写る力士の多くが出羽海部屋所属です。

慣れない力士生活は苦しく、武少年は逃げ帰ろうとして母に叱られたこともあったようです。⁽³³⁾

武蔵山 新弟子時代の回想

新弟子として入門してから、一ヶ月位は「相撲とり」ではなく「お客様」にすぎない。兄弟子達も可愛がつてくれる、辛い稽古もしないですむ。しかし、一ヶ月もすぎると猛烈な稽古をつけられる。このころから前相撲時代にかけては『中略』何から何まで苦しいことばかりであった。

(大和球士「土俵の哲学—武蔵山のノートより—」『相撲』六(七)⁽³⁴⁾)

四股名の謎

大正十五年(一九二六)一月、武少年は初土俵を踏みます。この時から「武蔵山」を名乗っていたとする説が有力ですが、最初は「多摩川」または「玉川」と名乗り、翌場所に改名したとする説もあります。⁽³⁵⁾

パネル④ 今とはこんなに違う！大相撲

武蔵山が現役だった昭和初期の大相撲は、現在とは大きな違いがありました。

賜盃の制作と大日本相撲協会の誕生

・写真「賜盃」『相撲』一(二)口絵⁽³⁶⁾《大倉精神文化研究所所蔵》



幕士の撰た変こい
所製をしをて
場銀名を在れ
本勝す。式いい現わ
は、優と盃たが使
盃最授は正盃が
賜内は初賜、ま賜
力にカ当政がえのま

大正時代までは、東京大角力協会と大阪大角力協会がありました。しかし、大正十四年(一九二五)四月に摂政宮(昭和天皇)の台覧相撲が行われた際の下賜金によって賜盃が制作されたことを機に、両協会が合併へ着手。同年九月、財団法人の設立認可を文部省に申請し、十二月に許可されました。その後、昭和二年(一九二七)一月には大日本大角力協会が誕生。同年

五月に日本大角力協会へ、昭和三年（一九二八）一月に財団法人大日本相撲協会へと改称しました。⁽³⁷⁾

様々なルールの変更

それまでは東西の団体戦で優勝を競っていましたが、賜盃の制作によって個人優勝制度が確立しました。⁽³⁸⁾また、大正十四年（一九二五）には引分や預りが廃止されます。⁽³⁹⁾昭和三年（一九二八）三月場所からは、相手方休場の場合に不戦勝とするルールが全力士に適用されました。⁽⁴⁰⁾

仕切り線と仕切り時間

興行不振の打開策として、昭和三年（一九二八）一月場所から、ラジオの実況中継放送に踏み切りました。それに伴って土俵中央に仕切り線を引き、従来は無制限であった仕切り時間に制限を設けました。⁽⁴¹⁾

勝負検査役

昭和五年（一九三〇）には、四本柱を背にして座っていた勝負検査役が土俵下に降りました。⁽⁴²⁾

土俵の大きさ

当時の土俵は俵が二重になっていましたが、昭和六年（一九三一）四月の天覧相撲の時から、内側の俵（直径十三尺、三・九四メートル）を取り払って土俵の直径を現在と同じ十五尺（四・五五メートル）に拡大しました。⁽⁴³⁾

武蔵山の声

（引用者注…昭和）六年五月場所小結の時にはじめて、大きい土俵を経験したのだが、とりたてて困ったというほどのことはなかった。でも土俵上の習慣は根強いもので、よく小さい土俵でとっているつもりで、もう土俵際だと思つてぐいぐい押して行つたのを、ピタリと止めて、打棄りを警戒して腰を落しにかかるはまだ土俵際には大分間があつて驚いたことが時にあつた。《中略》七年の春場所には、その方がとりやすくなつていた。《中略》大きい土俵は実力ある者に幸いし、変化にとんだ相撲をもうみつがある。

（大和球士「土俵の哲学―武蔵山のノートより―」『相撲』六（七）⁽⁴⁴⁾）

屋根の変化

・写真「神明造りの屋根と四本柱」

『相撲』一（二）口絵⁽⁴⁵⁾《大倉精神文化研究所蔵》

土俵の屋根は、昭和六年（一九三一）の天覧相撲を機に、それまでの入母屋造りから、神社の屋根を模した神明造りとなりました。⁽⁴⁶⁾
ちなみに、四本柱がなくなり、現在のような吊り屋根となったのは昭和二十七年（一九五二）です。⁽⁴⁷⁾



場所数の変遷

大相撲の本場所興行は、一月と五月の東京場所のみで各十一日間でしたが、昭和二年（一九二七）から関西本場所を春秋二回持つようになり、年間四場所となります。その後、昭和七年（一九三二）の春秋園事件を機に、翌

年から関西本場所を中止し、年二場所に戻りました。

一場所十一日間だった興行日数は、「双葉山時代」の相撲の人氣によって昭和十二年（一九三七）五月場所から十三日間、昭和十四年（一九三九）五月場所から十五日間興行となります。⁽⁴⁸⁾

武蔵山の声

私には十五日制の経験はない、十一日制と十三日制時代の土俵にのぼったのである。十一日制の場所で九日目、十三日制にして十日目あたりになると必ず体のつかれをはっきり感じてきたものだった。

（天和球士「土俵の哲学―武蔵山のノートより―」『相撲』六（七）⁽⁴⁹⁾）

明治から大正にかけて野球等の近代スポーツの隆盛により、相撲人氣は低迷しました。しかし、関東大震災からの復興や日中戦争の勃発という時代背景の中で、武蔵山や双葉山などの活躍により、相撲は再び人氣を博すようになります。当時のメディアでは、相撲の話題は新聞のほか、運動全般を扱う雑誌『野球界』で掲載される程

度でした。しかし、昭和十一年（一九三六）からは、相撲専門誌『相撲』が刊行されるに至ります。⁽⁵⁰⁾

・『野球界』二二（二）春場所相撲号 表紙⁽⁵¹⁾

《大倉精神文化研究所所蔵》



この表紙の力士は、武蔵山です。『野球界』は、野球界社による雑誌です。東京本場所が開かれる1月と5月の臨時増刊号に、相撲記事が掲載されました。

・『相撲』一（一）創刊号 表紙⁽⁵²⁾

《大倉精神文化研究所所蔵》



『相撲』は、大日本相撲協会による公式雑誌です。

パネル⑤ スピード出世―初優勝―

関東大震災、昭和恐慌、世の中には深刻な不景気の風が吹いていましたが、昭和四年（一九二九）五月に満十九歳の若さで入幕した武蔵山は、新聞で「未来の横綱」の大見出しが掲げられるなど、暗い世相を跳ね返す、角界の救世主として一躍人気の頂点となりました。

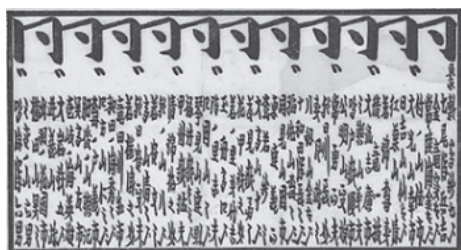
スピード出世

武蔵山は序ノ口、序二段、三段目、十両を各一場所で突破し、入幕までに五回全勝したこと⁽³⁴⁾から、当時の流行語から「流線型」と呼ばれたり、また飛行機に例えられたりしました。⁽⁵⁵⁾

大正十五年（一九二六）一月 初土俵⁽⁵⁶⁾

昭和二年（一九二七）一月 序二段

昭和二年（一九二七）五月 三段目



「番付」昭和2年（1927）5月場所
（西三段目）

《大倉精神文化研究所蔵》

昭和三年（一九二八）一月 幕下

・写真「幕下時の武蔵山」



『野球界』臨時増刊一八（二）挿画《寺田秀治氏所蔵》
⑤7

力士姿の写真としては最も古いものであり、数えて十八歳の時と思われます。まだ幼さの残る顔立ちで、髷もしっかりと結えていないように見えます。

昭和四年（一九二九）一月 新十両

十両以上になると、土俵入りの際に化粧廻しを付けることになります。化粧廻しは、後援会やスポンサー企業等から贈られます。

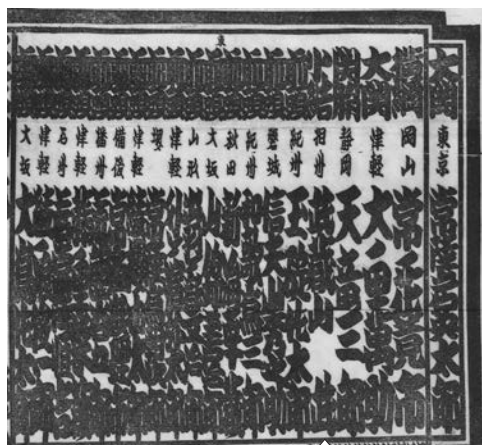
昭和四年（一九二九）五月 新入幕^{⑤8}

・写真「新入幕時の武蔵山」^{⑤9}



「昭和四年五月場所改正 新版大日本相撲協会力士写真番附」

《大倉精神文化研究所蔵》



「番付」昭和5年(1930)5月場所(東小結)
《大倉精神文化研究所蔵》

昭和五年(一九三〇)五月 小結

十両の力士が前頭に昇進することを入幕といいます。
この「丸に三つ柏」紋の入った化粧廻しは、刺繍の文字「鶴中西家見」から、横浜市鶴見区で醤油醸造業を営んでいた中西家より贈られたものであることが分かります。また、中西逸平は武蔵山会の会員でした。



昭和六年(一九三一)十月 大関^⑧
・写真「大関昇進時の武蔵山」
「昭和七年五月場所改正 新版大日本相撲協会力士写真番附」
《大倉精神文化研究所蔵》

番付表は、力士の順位を示した公式の表であり、当時は大日本相撲協会が印刷・配布していました。
昭和五年(一九三〇)五月、弱冠二十歳の武蔵山は小結へと昇進します。「武蔵国」出身だから武蔵山なのですが、出身地が神奈川県であるためでしょうか、「相州」(相模国)と書かれています。スピード出世に認識が追いつかず、協会が間違えたのかもしれませんが。

小結から関脇の位を飛ばし、大関へと昇進した武蔵山。顔付きが凛々しくなり、力士らしい体格へと成長しているのが分かります。後述するように、この雲龍図が描かれた化粧廻しは、新入幕時に神奈川県武蔵山後援会から贈られたものです。

昭和十年（一九三五）五月 横綱⁽⁶²⁾



「番付」昭和11年（1936）1月場所
（西横綱）

《大倉精神文化研究所所蔵》



武蔵山の得意技

寄り切り／上手投げ／下手投げ／突き出し⁽⁶³⁾

スピードある立ち合いから一気に押し立て、得意の右が入ると豪快な下手投げが強烈。しかも、足腰の無類の強さが特徴であった。

（野宮明雄『昭和の全三役力士略伝』私家版⁽⁶⁴⁾）

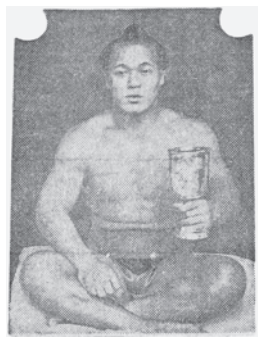
幕内優勝 昭和六年（一九三一）五月場所

私は、この場所中、全く何の気なしに角力つてゐたのです。優勝とか、額を掲げるとか云ふことは考へても見なかつたし、また誰が優勝するか、なども思つたこともなかつたのです。ですから、千秋楽の日、はたの人から言はれて、初めてさうかなと思つた位です。迂闊だと笑はれるかも知れませんが、実際うつかりして居りました。

※角力つて争うつて：「相撲をとつて」の意

（武蔵山武「うつかり優勝した」『野球界』二二（一二）⁽⁶⁵⁾）

・写真「優勝時の武蔵山」



(上) 時事新報社の優勝カップ

『時事新報』一九三二年五月二十五日付⁽⁶⁶⁾《大倉精神文化研究所蔵》

(下) 左は賜盃、手に持つのは東日寄贈杯

『東京日日新聞』一九三二年五月二十五日付⁽⁶⁷⁾《大倉精神文化研究所蔵》

パネル⑥ 後援会「武蔵山会」

武蔵山の地元では、飯田助夫を会長とする「神奈川県武蔵山後援会（神奈川地方武蔵山後援会）」が結成されていました。

昭和六年（一九三二）二月に京浜在住の後援者が企画

して、石井庄蔵以下八〇名を発起人代表とする全国組織「武蔵山会」⁽⁶⁸⁾を結成し、五月に会誌『武蔵山』を創刊しました。

・会誌『武蔵山』創刊号表紙⁽⁶⁹⁾



《寺田秀治氏所蔵》
武蔵山に関する貴重な情報源ですが、第二号は刊行されなかったようです。⁽⁷⁰⁾

武蔵山応援歌

佐藤惣之助作詞、福田蘭堂作曲で応援歌が作られています。ここでは、二番と四番の歌詞を紹介します。⁽⁷¹⁾

二、晴れの勝負に 花咲く若木

腕は高鳴る 力は燃える

あがる土俵は 男の舞台

男は千両 武蔵山

武蔵山勝て…武蔵山勝て…勝て…

四、武蔵一国 やつこりやさと背追つて

注飾や横綱 見あてにや立たぬ

日頃鍊磨の 業だめし

頑張れ頑張れ 武蔵山

武蔵山勝て…武蔵山勝て…勝て…

・写真「武蔵山と武蔵山会」

『武蔵山』創刊号口絵⁽⁷²⁾《寺田秀治氏所蔵》



後列右から、飯田九一（俳画家）、福田正夫（詩人）、佐藤惣之助（詩人）、亀井湘南（木琴奏者）。

前列右から、安東正臣（弁護士）、藤牧玄雄（医者カ）、武蔵山、桑原源十郎（酒商）。

引退相撲を主催

昭和十五年（一九四〇）五月二日、横綱武蔵山の引退相撲が開催されました。主催は武蔵山後援会、会場は靖国神社相撲場でした。⁽⁷³⁾横綱、大関以下多くの力士が出場し、翌日の『読売新聞』神奈川版で「ファン多数押しかけて極めて盛大であった、《中略》往年天下の人気を独占した強豪武蔵の引退相撲に相応しい情景だった」と報道されました。⁽⁷⁴⁾

武蔵山の後援会が贈った化粧廻し

新入幕

・写真「神奈川県武蔵山後援会が贈った化粧廻し」

『武蔵山』創刊号口絵⁽⁷⁵⁾《寺田秀治氏所蔵》

昭和四年（一九二九）の新入幕を祝して贈られたものです。図柄は飯田九一作の雲龍図で、向かって左端に「為武蔵山君九一作」と為書きが入っており、下には「神奈川県武蔵山後援会」と刺繍されています。

・写真「化粧廻しをつけた武蔵山」

葉書「大関 武蔵山武」《大倉精神文化研究所蔵》

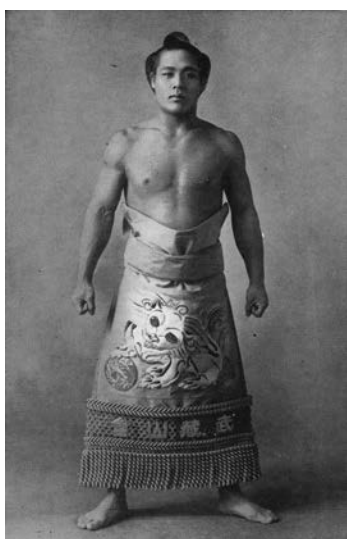


大関

・写真「武蔵山会が贈った化粧廻しをつけた武蔵山」

葉書「大日本大角力」武蔵山《大倉精神文化研究所蔵》

大関昇進前後の武蔵山を写した写真。廻し中央に大きく刺繍された「武蔵山」の文字の下にある「後援会」は、どの組織をさしているのか不明です。⁽⁷⁶⁾



昭和七年（一九三二）一月、大関昇進を祝って贈ったものです。

日本画家の川端龍子が描いた唐獅子が、淡いえんじ

の手まりを右手で押さえています。下に「武蔵山会」と刺繍されています。

横綱昇進時には、川合玉堂（飯田九一の師）に下絵を描いてもらう話もありました。²⁷⁾

化粧廻し贈呈を伝える記事

『横浜貿易新報』一九三二年一月十四日付朝刊²⁸⁾



春秋園事件渦中の新聞記事であり、武蔵山が大日本相撲協会に復帰すれば、武蔵山後援会がこの化粧廻しの贈呈式を行うことになっていると伝えています。

注

(1)

横浜すみどり環境局二〇二四年四月八日の記者発表資料で、横綱照ノ富士から二〇二四年度中に新横浜公園内に新たな土俵が寄贈される予定である事が明らかとなり、同年十二月八日には、土俵造りが着工された。

(2)

山本義一『古今名力士百傑伝』（大橋進一・株式会社博文館、一九四〇年一月十九日）、『第33代横綱 武蔵山武』（日本相撲協会公式ホームページ内「歴代横綱」、<https://www.sumo.or.jp/Yokozuna/profile/33/>、二〇一四年十二月六日最終閲覧）。

(3)

なお、横山すゞ「子を語る」（『野球界』第二五巻第七号、一三四～一三七頁、大橋進一・野球界社、一九三五年五月十日）では「十二月二日」とあるが、誤記と思われる。「日吉村野林」（『武蔵山・丙種の黒星頂戴』、『説売新聞朝刊』一九三〇年六月二十一日）、『川崎在日吉村駒井』（『武蔵山にも春回る』、『東京朝日新聞朝刊』一九三二年一月一日）等との誤記も見られる。

(4)

「仁平さんの家は米穀商をやり武さんは米穀を東京の方に売り出しに牛車をひいて出たものです」（川村融「教へ子武蔵山を語る」、『野球界』第二五巻第七号、一三四

「一三五頁、大橋進一・野球界社、一九三五年五月十日」、
「横山家は、江戸時代周辺の三カ村の米や雑穀を集荷する仲買人のような役目をもつ名主（村方三役の筆頭）なみの由緒ある旧家で、多くの田畑を持っていた」（高田角道「生きている横綱 第一回 三十三代・武蔵山武」、『相撲』第一五卷第三号、一一六―一一七頁、池田恒雄・ベースボール・マガジン社、一九六六年三月十五日）との記述もある。

(5)
仁平を「仁兵衛」（前掲注3『東京朝日新聞朝刊』）とする表記や、父仁平を兄駒林仁平とする記述も少なからず存在するが、誤記である。

「武蔵山、出生地は神奈川県橘樹郡日吉村駒林仁平氏の弟横山武こそ本名、明治四十二年生れの今年僅かに十八歳であるが、既に身長六尺三寸、体重三十貫を有す」（木村旭東「又一人角界に稀代の大物現はる」、『野球界』第一八卷第二号、一〇―一一頁、菅五太郎・野球界社、一九二八年一月十日）、「武隈は直ちにとある農家に、武少年をたづねた、早速弟子にくれなやかと交渉したが、主人はもとより兄の駒林仁平君が頑として承知しない」（『武蔵山が今の相撲となる迄』、『野球界』第二〇卷第二

号、五九頁、大橋進一・野球界社、一九三〇年一月十日）。このように、前掲注3と合わせ、武蔵山の角界入り初期からメディア内で既に武蔵山に関する誤情報が拡散していた。参照する際には十分な注意が必要である。

(6)
名跡「出来山」の襲名披露は、断髪式と同時に行われた（『武蔵山の断髪式』、『東京朝日新聞夕刊』一九四〇年一月十一日。「武蔵山の新年寄姿」、『読売新聞朝刊』一九四〇年一月十一日）。また、「不知火」への名跡変更は、当時の番付に「勝負検査役（出来山改不知火武司）」とあることから一九四三年一月であることが分かる。

なお、「武司」表記について補足すると、「出来山」襲名直後の一九四〇年五月場所番付（一九四一年五月場所番付までは「出来山武」と記載されているが、一九四二年一月場所以降は「出来山武司」（「不知火」への変更後は「不知火武司」となっている。「司」の文字の有無がどのような意味をもつのかは、今後の研究課題である）。

(7)
「大日本相撲協会彙報」（『相撲』第九卷第二号、三一頁、彦山光三・財団法人大日本相撲協会、一九四四年二月一日）。

(8)
一九四五年十一月場所（十一月十六―二十六日、於両国

国技館）番付を最後に名前の記載がなくなる。一九四五年十一月、角界民主化のために大日本相撲協会の全役員が理事長宛に辞表を提出しており（「角界民主化へ協会の全役員が辞表提出」、『読売新聞朝刊』神奈川版 一九四五年十一月二十七日）、この中に不知火（武蔵山）も加わっていたと思われる。その後十一月三十日に新役員が選出されており、再任された理事も多いが、不知火（武蔵山）の名は無い（「相撲協会新役員」、『読売新聞朝刊』神奈川版 一九四五年十二月一日）。

(9)

「横山武氏」、『読売新聞』一九六九年三月十六日。その他に、野宮明雄『昭和の全三役力士略伝』（野宮明雄、一九七九年二月十一日）、前川正男「とうよこ沿線物語 9 日吉編その1」（岩田忠利『とうよこ沿線』橙第一四号、二四〇二六頁、岩田忠利・東横沿線を語る会、一九八三年一月一日）等を参照。

なお、朝日新聞は、死因を狭心症としている（「武蔵山武氏」、『朝日新聞』一九六九年三月十六日）。

(10) 前掲注4 川村融「教へ子武蔵山を語る」では「或る事情で家庭を離れてゐます」としている。ほか、「家の都合で樺太へ去つて」（加藤進「新横綱武蔵山関」、『日曜報

(11)

知』第二二二号、一二頁、報知新聞社、一九三五年六月二日）、「馴れぬ事業に手を出したのが失敗のもと、金につまつて」（花村哲夫「天晴れ若き新横綱武蔵山の母子愛涙話」、『婦人倶楽部』第一六巻第七号、二〇四―二一七頁、新井兵吾・大日本雄弁会講談社、一九三五年七月一日）、「父親はカラフト（今のソ領サハリン）へ出稼ぎにいったまま姿を消してしまった」（池田雅雄「歴代横綱正伝58 武蔵山武伝」、『相撲』第二四巻第一三号、一五二―一五五頁、池田恒雄・ベースボール・マガジン社、一九七五年十一月十五日）等、原因については諸説記載がある。その他に口伝の説もあるが、特定できていない。前掲注10 池田雅雄「歴代横綱正伝58 武蔵山武伝」参照。また、「（引用者注・横山武が）あまり大兵なので、悪い友達がノツポく」と綽名したという（陶観光「新しく横綱になった孝子武蔵山」、『少年倶楽部』第二二巻第七号、一四六―一四七頁、須藤憲三・大日本雄弁会講談社、一九三五年七月一日）。さらには、朋輩の悪童から「若い衆の生徒ハン、若い衆の小学生」と身体が大きいことをからかわれ、「僕、もう学校いやちや、どうしても止める」と言い退学してしまったと、母すがインタ

ビューで語っている（「人気の花形 我子に持てば ②横綱の母 ニュース聞かねば御飯も咽喉を通らない」、「東京朝日新聞朝刊」、一九三六年一月十四日）。

一方で、「猫背の非力な少年だった」とする新聞報道もある（前掲注3『東京朝日新聞朝刊』）。

(12)

口絵写真「写真自叙伝 武蔵山関の巻」（『野球界』第二五巻第七号、大橋進一・野球界社、一九三五年五月十日）。

(13)

「赤門坂」の名前は、坂道の中程にある横山氏宅に由来すると言われている。武蔵山の家は、この横山氏宅より少し坂の下側にあった。『創設30年記念誌 日吉目で見える日吉のあゆみ』（日吉台中学校創設30年記念誌委員会、一九八〇年十月二十三日）には、武蔵山の家を赤門坂の名前の由来となった「横山氏の分家にあたる」と書いているが、聞き取りによると現在両家共にその伝承は伝わっていない。

(14)

前掲注9 前川正男「とうよこ沿線物語9 日吉編その1」、「日吉特集」（『岩田忠利』とうよこ沿線 樫第三二二号、三九頁、岩田忠利・東横沿線を語る会、一九八六年二月二十日）、横浜市立駒林小学校創立二十周年実行委員会記念誌部『横浜市立駒林小学校創立二十周年記念誌』（横

浜市立駒林小学校創立二十周年実行委員会、一九九三年六月二十六日）、吉山昌秀「日吉出身「横綱武蔵山」物語」（『かながわ』No.五〇七、神奈川法人会、二〇一二年九月十日）等。

(15)

前掲注12「写真自叙伝 武蔵山関の巻」参照。

(16)

前掲注2 横山すゝ「子を語る」参照。

(17)

明治神宮競技大会とは、一九二四年～一九四三年に明治神宮外苑のスポーツ・体育施設を主会場として行われた全十四回の国家的体育行事である。一九二六年の第三回大会より「明治神宮体育大会」と名称を変更。明治天皇の聖徳を敬仰し、国民の心身鍛錬・精神作興を目的とした（横浜市体育史企画刊行委員会・横浜市体育史編集会『横浜スポーツ百年の歩み』、横浜市教育委員会事務局体育課、一九八九年三月三十一日。「明治神宮競技大会」、明治神宮歴史データベース内「年表用語説明」、<https://www.rekishidb.meijinguor.jp/glossary/detail.php?id=16>、二〇一四年十二月六日最終閲覧）。

数多くの媒体で、横山武（武蔵山）が明治神宮の大会かその県予選に相撲または砲丸投げの選手として出場したと語られてきた。

新聞記事では、「廿七歳でこの栄冠 武蔵山が横綱に」
『東京朝日新聞夕刊』一九三五年五月二十二日。

また、雑誌記事では、前掲注11陶観光「新しく横綱になった孝子武蔵山」、江馬盛「諸国相撲帳58 神奈川県(完)」、『大相撲』第九巻第六号、一一四～一一七頁、読売新聞社、一九六三年六月)、横川橋蔵「横綱むかしから今まで三十三代・武蔵山武」、『相撲』第一三巻第六号、一八五頁、池田恒雄・ベースボール・マガジン社、一九六四年五月十五日)、前掲注4高田角道「生きている横綱第一回三十三代・武蔵山武」、相馬基「武蔵山逝く！悲運の横綱を悼んで」、『相撲』第一八巻第五号、一〇八～一〇九頁、池田恒雄・ベースボール・マガジン社、一九六九年四月十五日)、前掲注10池田雅雄「歴代横綱正伝58 武蔵山武伝」。

書籍では、前掲注9野宮明雄『昭和の全三役力士略伝』、景山忠弘・小池謙一編著『古今大相撲力士事典』(佐藤今朝夫・株式会社国書刊行会、一九八九年十月三十日)、小坂秀二『昭和の横綱』(高橋国博・株式会社冬青社、一九九四年一月二十五日)等が挙げられる。

しかし、武蔵山自身は「従来、私につきまして、書いて

くれました新聞や雑誌、また立派な書物なんかにも『中略』大てい、でたためですよ、嘘ですよ。その一つは、私が、相撲選士として、神宮相撲大会に出場したとか、いや、大会には出なかつたが、県下、即ち神奈川県の予選では大いに活躍したとかいふのですが、私も、その予選に出ることは出ましたが、それは郡(橘樹郡)の予選なんです。『中略』村の人たちから、勧められて出たのですが、結局私は、郡の補欠といふことになり、たうとう、県の予選には出場しませんでした。これは、大正十三年の話です」と、明治神宮競技大会への出場を否定している(武蔵山武「武蔵山縦横談」、『話』第五巻第二号、三四～四三頁、文芸春秋社、一九三七年二月一日)。また、『第一回明治神宮競技大会報告書』(内務省衛生局、一九二五年三月三十一日)を調べても、出場選手中に横山武の名前は無い。

武蔵山の談話に一番近い内容を紹介しているのが、会誌『武蔵山』である。同誌によると、一九二五年四月上旬に、多摩川丸子の広場で開催された郡連合青年団の競技会に相撲で出場した横山武を、元万朝報記者石井七三が見て、その話を聞いた橘樹郡中原町(現川崎市中原区)

町長の安藤安が後に本人を確認し、秋元春朝子爵を介して出羽海部屋へ紹介したことによるとしている（安藤安「横山武を武蔵山とするまで」、『武蔵山』創刊号、三三―三五頁、武蔵山会、一九三二年五月）。また、同誌で朝山憲治も「慥か大正十四年の春と記憶する」と書いている（朝山憲治「我が武蔵山を始めて知った話」、『武蔵山』創刊号、二二頁、武蔵山会、一九三一年五月）。

明治神宮競技大会は、第一回が一九二四年十月三十日、十一月三日に開催され、第二回が一九二五年十月三十日、十一月一日に開催された。第二回大会の時に横山武は出羽海部屋に入門しているので、本大会に出場する可能性があったのは第一回のみである。郡や県の予選会ならば、一九二四年と一九二五年共に出場が可能であったと思われる。しかし、一九二四年（武蔵山の談話）なのか一九二五年（会誌『武蔵山』）なのか、本稿執筆時点では特定できていない。

(19) 前掲注12「写真自叙伝 武蔵山関の巻」参照。

(20) 前掲注2横山すゝ「子を語る」参照。

(21) 管見の限り、入門時期については二説存在している。一九二五年十月説と、同年十一月説である。しかし、左記

の記載から、この二説を明確な正誤で区別することは困難であると思われる。

前者は、前掲注3『読売新聞朝刊』『武蔵山・丙種の黒星頂戴』、前掲注10池田雅雄「歴代横綱正伝58 武蔵山武伝」、前掲注18景山忠弘・小池謙一編著「古今大相撲力士事典」で言及されている。後者は、前掲注18『武蔵山』創刊号中の「武蔵山年譜」や、安藤安「横山武を武蔵山とするまで」（三三―三五頁）にて「九月中旬本人の身柄を借受け、出羽親方（出羽親方注マデ）に対面させ、一週間滞在中師弟の意気投合し、同年十一月十四日正式に校長伯父友人代表に送られ、目出度出羽の海部屋に這入つたのである」との記載がある。

しかし、年譜や安藤談が入門時期を十一月と定めるなか、同誌で亀井湘南が「大正十四年十月下旬本所相生町の出羽の海部屋を訪れた私は親方から神奈川県から仲々に有望な新弟子が入門したと言ふて武蔵山たる横山武君を照会された」と語っている（亀井湘南「武蔵山出世録と有望力士と云ふ事につきて」、『武蔵山』創刊号、三一―三三頁、武蔵山会、一九三一年五月）。つまり、横山武が出羽海部屋に正式入門したのは十一月だが、事前に親方

を含む部屋の人間との面会や、稽古等の見学や短期滞在を経ていたと考えられる。同じ雑誌の中でも亀井湘南と年譜・安藤安で情報が異なるように、二説存在するのはこうした状況だった故だと推測される。

ただし、「十一月に正式入門した」と決定づける明確な根拠は本稿執筆時点で見つかっていないことを付記しておく。

(22)

横山武（武蔵山）の角界入りまでの経緯、特に勧誘時の状況については武蔵山現役時から様々言及されているが、関係者の談話にブレがあり、確定しきれない。

しかし、信憑性が最も高いと考えられる、勧誘に赴いた武隈と武蔵山自身の話を要約すれば、武隈以前より既に①井筒部屋の日州山、②振分部屋の立汐を後援していた鶴見の醤油醸造業・中西逸平と鶴見の新開社・秋山の両氏、他にもいくつか勧誘があったようだが、いずれも断ったという。

出羽海部屋は、武蔵山の実家の隣にある寺（金蔵寺）の息子が日本大学相撲部と関係があり、そこから当時部の師範をしていた武隈へ話がいったこと。また、中原町の町長・安藤安氏が横山武の資質を見込み、五代目出羽海

親方（常陸山）夫人へ直に手紙を出したことが横山武を知る契機だったらしい。武隈も初回勧誘に向かう道中の途中、休憩で立ち寄った矢上（地名・日吉村の字）の醤油醸造場より横山武家へ使いを遣ったが、やはり同様に断られている。それでも武隈は諦めきれず、開発工事や大雨でひどく状態の悪い道をなんとか通り、横山武家へ辿り着いた。実際に対面し何時間・何日にも及んで話した結果、とうとう母すが折れる形で承諾。横山武も角界入りする決意をしたという流れが大筋のようである（前掲注18安藤安「横山武を武蔵山とするまで」。前掲注18武蔵山武「武蔵山縦横談」。「四横綱・二大関顔揃座談会」、「相撲」第三卷第一号、四〇一二頁、彦山光三・財団法人大日本相撲協会、一九三八年一月五日。武隈勇治郎「武蔵山を語る」、「野球界」第二八巻第八号、八六〇九〇頁、大橋進一・野球界社、一九三八年五月十日）。

(23)

前掲注22武隈勇治郎「武蔵山を語る」参照。

(24)

出羽海部屋公式ホームページ内「部屋の歴史」(<https://www.devanouninet/history/>、二〇二四年十二月六日最終閲覧)。

(25)

二〇二四年十二月現在、出羽海部屋出身横綱は、第十九

代横綱・常陸山、第二十六代横綱・大錦、第二十七代横綱・栃木山、第三十一代横綱・常ノ花、第三十三代横綱・武蔵山、第三十七代横綱・安藝ノ海、第四十一代横綱・千代の山、第五十代横綱・佐田の山、第五十七代横綱・三重ノ海の九名である（日本相撲協会公式ホームページ内「歴代横綱」<https://www.sumo.or.jp/Yokozuna/yokozuna/>、二〇一四年十二月六日最終閲覧）。

(26) 前掲注24出羽海部屋公式ホームページ参照。

(27) 口絵写真「角界中興ノ祖 故出羽海谷右衛門氏」（『出羽海会誌』、正司實男・正司方出羽海会事務所、一九三六年一月十五日）。

(28) 前掲注24出羽海部屋公式ホームページ参照。また、「第19代横綱 常陸山 谷右衛門」（日本相撲協会公式ホームページ内「歴代横綱」<https://www.sumo.or.jp/Yokozuna/profile/19/>、二〇一四年十二月六日最終閲覧）。

- (29) 口絵写真「総帥 出羽海梶之助氏」（『出羽海会誌』、正司實男・正司方出羽海会事務所、一九三六年一月十五日）。
- (30) 前掲注24出羽海部屋公式ホームページ参照。
- (31) 相馬基の司会で武蔵山と男女ノ川が対談した「社会人士 俵入 日の下開山に未練なし」（『相撲』第八巻第九号、

(32)

一四六―一五三頁、池田恒雄・ベースボール・マガジン社、一九五九年八月十五日）によると、一九二九年五月二十七日に水交社で行われた天覧相撲について武蔵山は、「（引用者注…新入幕で）私優勝したんですけど、そのとき叱られたね。親方から、目の玉から火の出るほど叱られたよ。この野郎、遠慮しろっていうんだ」と回顧している。また、「沖津海との一番にけがしたんですよ。それは一応全快したんですが、その後、玉錦君と相撲とってけがをしたんですよ。振られて肩が抜けたんですよ。《中略》そのときに、私が負ければ休ましてくれただ。それを寄り倒して勝ったんだな。《中略》部屋の親父から、お前相撲勝って休むとはどういうわけかっていわれて、とうとう治療できずに巡業引っぱってかれて、痛い腕をぶら下げて無理したために、その傷がだんだん大きくなったんですね」と語っている。師匠出羽海親方の古い指導法に対して、理論派の武蔵山には納得できない思いがあったのかもしれない。

拳闘界進出報道や春秋園事件の遠因の一つとして、親方と武蔵山の師弟関係を再検証する必要があるだろう。

「昭和天覧角力」（『国際写真情報』第九巻第六号、石原

俊明・国際情報社、一九三〇年六月一日。

(33) 前掲注10花村哲夫「天晴れ若き新横綱 武蔵山の母子愛 涙話」参照。

(34) 大和球士「土俵の哲学―武蔵山のノートより―」(『相撲』第六卷第七号、九六―一〇一頁、池田恒雄・ベースボール・マガジン社、一九五七年四月十五日)。

(35) 武蔵山によると「私のしこ名武蔵山は、この部屋の大先輩が一人は、常陸から出たので常陸山、他の一人は、栃木から出たので栃木山と、それぞれ名づけて、共に相撲界に見事な足跡を印したので、武蔵山がよからうと、師匠(引用者注…出羽海親方)が決めてくれたのです」(前掲注18武蔵山武「武蔵山縦横談」と述べている。加藤也穆「五大力士の顔廓 土俵を下りた彼氏等の話」(『野球界』第二四卷第七号、五四―五九頁、大橋進一・野球界社、一九三四年五月十日)、前掲注18横川橋蔵「横綱むかしから今まで 三十三代・武蔵山武」、前掲注9野宮明雄『昭和の全三役力士略伝』でも同様の旨が記されている。

また、安藤安は出羽海親方に対して「私年来の希望通り

多摩川と命名方申込んだ処、十二月に至り御依頼の名前もよいけれど、目下玉の川と云ふ実例あり、誠に弱い

《中略》武蔵の出身だから武蔵山が一番宜しからうとの通報で」決まると述べ懐いている(前掲注18安藤安「横山武を武蔵山とするまで」。相馬基も、「強い有力力士の名をづがせてほしいと出羽海にお願いしたら、言下に『《中略》武蔵山とします」といわれ」たという(前掲注18相馬基「武蔵山逝く―悲運の横綱を悼んで」)。

一方で、前掲注10花村哲夫「天晴れ若き新横綱 武蔵山の母子愛涙話」、前掲注10池田雅雄「歴代横綱正伝58武蔵山武伝」、『別冊相撲 春季号 昭和の名横綱シリーズ6 玉錦三右衛門』(池田郁雄・ベースボール・マガジン社、一九八〇年五月二十日)や、前掲注9前川正男「とうよこ沿線物語9 日吉編その1」では、初土俵時のみ四股名が「多摩川」または「玉川」だったとしている。

(36) 口絵写真「森蔵」(『相撲』第一卷第一号、彦山光三・大日本相撲協会出版部内相撲発行所、一九三六年五月十日)。
(37) 相馬基『改定増補 相撲百年』(土子猛・株式会社時事通信社、一九七〇年十月一日)、『近世日本相撲史』第一卷(池田恒雄・ベースボール・マガジン社、一九七五年四

月三日)、土屋喜敬『ものと人間の文化史179・相撲』
(一般財団法人法政大学出版局、二〇一七年四月十八日)。

(38) 前掲注37『近世日本相撲史』第一巻参照。

(39) 前掲注37『近世日本相撲史』第一巻参照。

(40) 前掲注37『近世日本相撲史』第一巻参照。

(41) 前掲注37『近世日本相撲史』第一巻参照。

(42) 前掲注37『近世日本相撲史』第一巻参照。

(43) 前掲注37『近世日本相撲史』第一巻参照。

(44) 前掲注34大和球士「土俵の哲学―武蔵山のノートより―」
参照。

(45) 口絵写真「渦巻館内」(『相撲』第一巻第一号、彦山光
三・大日本相撲協会出版部内相撲発行所、一九三六年五
月十日)。

(46) 前掲注37『近世日本相撲史』第一巻参照。

(47) 前掲注37土屋喜敬『ものと人間の文化史179・相撲』
参照。

(48) 前掲注37『近世日本相撲史』第一巻、『近世日本相撲史』
第二巻(池田恒雄・ベースボール・マガジン社、一九七
七年三月十五日)参照。

大日本相撲協会は、大日本関西角力協会(大日本関西相

撲協会)が大阪を本拠に設立(一九三三年二月)された

のを機に、関西本場所を中止した。その後、一九三六年

十月に大阪市堂島大橋北詰にて松竹興行会社主催の興行
を開催。翌六月には、大阪大国技館落成のこけら落としと

して第一回大阪大場所を開催している。これ以降大日本
相撲協会は関西興行を再開した。

(49) 前掲注34大和球士「土俵の哲学―武蔵山のノートより―」
参照。

(50) 渡邊光太郎『昭和の相撲史 戦前篇』(渡邊知枝・渡邊藤
子・渡邊光彦、一九八八年七月)。

(51) 『野球界』第二二巻第二号(大橋進一・野球界社、一九
三二年一月十日)。

(52) 『相撲』第一巻第一号(彦山光三・大日本相撲協会出版
部内相撲発行所、一九三六年五月十日)。

(53) 前掲注10池田雅雄「歴代横綱正伝58 武蔵山武伝」参照。
ただし、現時点での典拠は当該記事のみで、いずれの新
聞記事なのか未確認である。

(54) 伊藤忍々洞「横綱武蔵山再検討」(『野球界』第二八巻第
一号、二七七―二七九頁、大橋進一・野球界社、一九
三八年七月一日)、前掲注2山本義一『古今名力士百傑

伝』参照。

(55)

流線型とは、空気抵抗を減らして乗り物のスピードアップをはかる流体力学から生まれた語である。これを採用した流線デザインの鉄道車両が世界的に流行り、日本でも導入されたことで広まった。曲名や体型を言い表す際にも使用された。武蔵山のスピード出世を流行語の流線型に見立てたのだらう(米川明彦『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』、株式会社三省堂、二〇〇二年十月十日)。

具体的には、「武蔵山の飛行機昇進」(藤井猪勢治「武蔵山君足下へ」、『野球界』第二〇巻第七号、二六―二八頁、大橋進一・野球界社、一九三〇年五月十日)、「流線型的に躍進した武蔵山」(十條四郎「彼が旗挙げる迄 ハイテンポ出世力士 武蔵山純情熱血美談」、『野球界』第二五巻第七号、九九―一〇四頁、大橋進一・野球界社、一九三五年五月十日)といった表現で使われた。

(56)

前掲注2日本相撲協会公式ホームページ参照。

(57)

前掲注5木村旭東「又一人角界に稀代の大物現はる」参照。

(58)

前掲注2日本相撲協会公式ホームページ参照。

(59)

一九二九年五月の写真番付であることから、「新入幕時の武蔵山」としたが、一九二九年一月撮影の可能性もある。この当時は、複数年にわたって様々なメディアで同じ力士写真が使い回される事があった。そのため、メディアへの掲載・使用時期と撮影時期とが乖離していることがあるため、注意が必要である。

(60)

横山武家の家紋は「檜扇」紋であり(前掲注18安藤安「横山武を武蔵山とするまで」)、「丸に三つ柏」紋はスポンサーである中西家の家紋と思われる。

(61)

毎場所後の番付編成会議において新大関・新横綱が置かれることが決定した場合、日本相撲協会(当時は大日本相撲協会)から該当力士に使者が派遣され、昇進決定の旨を通達する昇進伝達式がある。昇進伝達式を受けることにより、新番付発表前から該当力士は昇進位に応じた待遇を受けられた。当時の新番付編成会議は毎場所千秋楽当日の夜に行われ、通達つまり昇進伝達式は翌朝に行われるのが慣例であった。また、当時の新聞記事でも、大日本相撲協会から昇進の通達があった力士に言及する際、昇進後の位で彼等を言い表す事例が散見される。そのため、本展示では各位への昇進通達時の年齢にて記し

た。武蔵山の場合、大関昇進の通達は、一九三一年十月二十日である（『武蔵山一躍 大関に昇進 記録破りの目ざましい出世』、『横浜貿易新報』一九三一年十月二十一日）。

(62) 武蔵山への横綱昇進の通達は、一九三五年五月二十一日である（前掲注18『東京朝日新聞夕刊』）。

(63) 武蔵山の幕内戦績は、二百四十五戦中百七十四勝である。うち、寄り切りは三十回、上手投げは十六回、下手投げは十五回、突き出しは十一回決まり手となった。なお、集計は大倉精神文化研究所での調査に拠る。

(64) 前掲注9野宮明雄『昭和の全三役力士略伝』参照。

(65) 武蔵山武「うっかり優勝した」（『野球界』第二卷第二号、四〇〜四一頁、大橋進一・野球界社、一九三二年一月十日）。

(66) 「本社の優勝額と大銀盃を獲得 祝福される武蔵山」（『時事新報』一九三二年五月二十五日）。

なお、当該記事の原資料は、寺田秀治氏よりご寄贈いただいた『昭和六年切抜』を使用している。この資料は、一九三〇年十二月〜一九三一年十二月までの、東京・大阪を中心とする新聞の相撲記事がスクラップされている。

縦四七・二センチ×横五八・三センチ×幅四・八センチの冊状で、全一〇八頁、記事総数は一八〇〇以上にのぼる。昭和前期の相撲報道が如実に分かる、貴重な資料である。

(67) 「優勝に輝く武蔵山」（『東京日日新聞』一九三一年五月二十五日）。当該記事の原資料については、前掲注66を参照。

(68) 会則によると、武蔵山会には会長一名と顧問及び幹事若干名を置くと定められているが、誰が任命されていたのかは資料不足のため不明である。

(69) 『武蔵山』創刊号、武蔵山会、一九三一年五月。

(70) 『武蔵山』創刊号では、「次号は来春場所に発行 原稿締切 十二月一日」と予告されているため、第二号の原稿も集められたと思われる。しかし、第二号はこれまでに発見されていない。翌年の一九三二年一月に起きた春秋園事件が原因で刊行されなかった可能性が高い。

(71) 福田蘭堂作曲の楽譜は未発見である。

(72) 口絵写真「★近況として」（『武蔵山』創刊号、武蔵山会、一九三一年五月）。

(73) 「武蔵山引退披露大相撲」（『読売新聞朝刊』及び『東京

朝日新聞朝刊』一九四〇年四月十七日)。

(74) 「武蔵山の引退相撲」(『読売新聞』神奈川版 一九四〇年五月三日)。

(75) 口絵写真「昭和四年五月場所入幕祝ひとして神奈川県武蔵山後援会より贈りしもの(雲龍図・飯田九一氏筆)」(『武蔵山』創刊号、武蔵山会、一九三一年五月)。

(76) 武蔵山を応援していた組織名として、「神奈川県武蔵山後援会」、「武蔵山会」、「武蔵山後援会」、「後援会」を資料中で確認している。しかし、これらが同一組織をさすのか否か。同一組織であるとするならば、いつ名称を変更したのか。別組織であるとするならば、実態はどのように異なっていたのか。前掲注68と同様に資料不足のため、現時点で不明な点が多い。

(77) 「未練はつきぬ この化粧廻し 打棄り食つた武蔵山びいき」(『東京朝日新聞夕刊』一九三二年一月十五日)。

(78) 「新興力士団を脱走した武蔵山の心境は？」(『横浜貿易新報』一九三二年一月十四日)。

注76でふれたように、武蔵山を応援していた組織名が数通り確認できるが、その実体は不明である。この化粧廻しの贈呈者についても同様で、化粧廻し本体には「武蔵

山会」と刺繍されているが、新聞記事では「武蔵山後援会」と記載されており、組織名の表記が不一致である。また、記事の掲載後まもなく武蔵山は大日本相撲協会へ復帰したが、はたして記事の通りに贈呈式が行われたのかは未確認である。